

● 糖尿病治療の最前線 ●

医療の進歩が支えた 「勇気ある選択」

頸動脈の動脈硬化でステント留置術を受けたGさん

担当医



久保 明先生

医学博士 糖尿病内分泌専門医
医療法人財団百葉の会 銀座医
院 院長補佐・抗加齢センター長

患者氏名	G・F様	年齢	77歳	性別	男性	現病歴	糖尿病 動脈硬化
------	------	----	-----	----	----	-----	----------

Gさんが糖尿病を発症されたのは50代のことでした。以来、かれこれ20年ほど診させていただいています。

現在、1日20単位のインスリン治療を行われており、ヘモグロビンA1cは7.5%とまあまあの数値です。糖尿病の3大合併症のうち、腎症によるアルブミン尿や神経障害による多少のしびれがあるものの、いずれも軽度の状態です。

ただ、2年前に首の左右にある頸動脈に動脈硬化が起きていることが判明。それもかなりの狭窄率でした。頸動脈は

脳に血液を運ぶための重要な血管です。この血管が著しく狭くなると、脳梗塞を発症する危険性が高まります。

そこで専門医のもと、切らずに頸部の血管を治療する「ステント留置術」を行うことになりました。ステント留置術とは、血管を通じてカテーテルという細いチューブを送り込み、細くなっているところを拡張させる手術です。

切らないとはいえ、高齢者の場合、後遺症などのリスクが皆無とはいえません。70代後半ではあきらめる人も少なく

ありません。しかし、Gさんは「まだ頑張れる。人生これから」と積極的に治療を受け、快癒することができました。いつ血管が詰まるかわからない、という不安を抱えたまま暮らしたくないという気持ちもあったのでしよう。

思えば、Gさんが糖尿病になられた当時は、まだステント留置術はポピュラーでなかった時代です。Gさんの勇気ある選択に敬意を表するとともに、医療技術の進歩を改めて実感した出来事でした。